



木の切り口に、すみをぬるのはどうしてなの

すみは、根などの切り口が、くさるのを防ぐ

木を植えかえるために、大きく広がった根を切り落としたり、大きくなった株の株分けをしたりするとき、根や、くきに、切り口ができます。切り口をそのままにして土の中に植えると、切り口からいろいろな細菌が入って、くさってきて、木がかれてしまいます。そんなとき、昔から、切り口に、習字に使うすみをぬると、切り口がくさらないといわれてきました。

すみが、切り口にうすい膜を作る

習字のすみは、松や植物油などを燃やして、出てくるすすを集め、にかわ（接着剤）でかためて作ります。すすは、小さい炭素のつぶが集まったもので、すき間がたくさんあります。

すみを、できるだけこくすって、根などの切り口にぬり、よくかわかします。すると、にかわとすみの細かい粉の、うすい膜が、切り口にかぶせられたようになります。この膜のため、土の中の細菌は、切り口の中に入ってこられません。また、すみの小さなつぶのすき間から、植物が呼吸するための、空気などは、出入りできます。そのため、切り口がくさるのを防げるのです。すみのかわりに、ぼくじゅうなどを使っても、中に薬品を加えてあるため、ぬっても効き目がありません。

空気中にしている枝には、すみは効果がない

空気中にしている木の枝などの切り口には、雨や風にあたるので、すみをぬっても、あまり効き目がありません。すみよりもっと強力な、殺菌力がある農薬などをぬります。

（監修・矢野 亮）

